

原著

「右の頬を打たれたら」『マタイ』5, 39についての
アウグスティヌスの解釈林 明 弘^{*1}

要 約

「右の頬を打たれたら左の頬を差し出せ」『マタイ』5, 39というイエスの言葉は現代人にとっては、おそらくトルストイとガンジーの影響と思われるが、「悪に対し悪を以って報いてはならない」という無抵抗、無暴力主義を表明したことば、あるいは暴力による報復を禁止したことばであると解釈している人が多いように思われる。しかしアウグスティヌスはまったく違う解釈をしている。「右の頬」とは霊的なあるいは天上の善きもの、「左の頬」とは肉のあるいは地上の善きもので、どちらも善きものであることに変わりはないのだが、どちらを優先すべきであるかはキリスト教徒にとっては明白である。そして「左の頬をも向けなさい」とは「右の頬も左の頬も打たれるままにせよ」という意味ではなくて、「左の頬を向けることによって右の頬を打たれないようにせよ」という意味にアウグスティヌスは解釈する。つまり「肉的な善きものを犠牲にしても霊的な善きもの（特に信仰）を守りなさい」という意味に解釈している。

「右の頬を打たれたら」『マタイ』5, 39について
のアウグスティヌスの解釈

序

「右のほほを打たれたら、左の頬をも差し出せ」という『マタイ伝』第5章39節のイエスの言葉は通常「悪に対して悪を以って報いるなかれ」という無抵抗、非暴力主義の意味に解されることが多いが、これはおそらくトルストイとガンジーの影響と思われる。たとえば平凡社の『哲学事典』で「無抵抗主義」の項目を見ると、「悪に対する暴力的抵抗を否定する主義。キリストの『人もし汝の右の頬を打たば左をも向けよ』のごとく悪に対するに暴力的悪を以ってせず、なすままにしてその悪であることを悟らせ、改悛にいたらせようとする絶対的人間愛の立場。近世においてはトルストイ、ガンジーが代表的な例である」と記載されており、その後トルストイの思想が世界的な影響を与えたと書いてある。

確かにこれも一つの可能な解釈であることを私は否定しない。しかし本論ではカトリックの教義の礎を築いたといわれるアウグスティヌスがこれとはまったく違う解釈をしていることを示したい。そしてその解釈の鍵となっているのが「右」と「左」と

いう言葉である。アウグスティヌスはこの言葉にこだわって「右の頬」とは霊的あるいは天上の善きものであり「左の頬」とは肉のあるいは地上的な善きものであると解釈する。「左の頬をも差し出せ」というのは、「地上的な善きものを犠牲にしても霊的な善きもの（特に信仰）を守れ」という意味だとアウグスティヌスは言う。以下の論述においてわれわれはアウグスティヌスの解釈の道筋を追ってみよう。

I 聖書における「右」と「左」

聖書には「右」と「左」が対比されて使われている箇所がいくつかある。「右の手がすることを左の手に知らせるな」(『マタイ』6, 3)とか「人の子が栄光に輝いて・・・来るとき、右側の人に言う。『さあ、私の父に祝福された人たち、天地創造の時から、お前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。』・・・それから、王は左側にいるひとたちにも言う。『呪われたものども、わたしから離れ去り、悪魔とその手下のために用意してある永遠の火に入れ。』」(『マタイ』25, 34-41)というのが有名であるが、この他にアウグスティヌスが参照する箇所は『箴言』3, 16の「右の手には長寿を、左の手には富と名誉を持っている」、『雅歌』2, 6「あの人左の腕をわたしの頭の下に伸べ、右の腕でわ

*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床心理学科
(連絡先) 林 明弘 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

たしを抱いてくださればよいのに」。特に「右手」だけに言及している箇所として『詩編』144, 8の「彼らの口は虚しいことを語り、彼らの右の手は欺きを行う手です」がある。しかし最も問題となるのは『詩編』121, 5の「主はあなたを見守る方、あなたを覆う陰、あなたの右にいます方です」これがなぜもっとも問題となるかはこの日本語訳の中にすでに現れている。今、「右手」だけに言及している箇所としてこの一節を挙げたつもりなのだが、これが「右手」ではなく、「あなたの右にいます方」となっているからである。この日本語訳は新共同訳に拠ったのだが、たとえば古い1963年の日本聖書刊行会の訳では「主はあなたの右の手を覆う陰」となっているし、DEUTSCHE BIBELGESELLSCHAFTの Revidierter Text 1975でも“der Herr ist dein Schatten über deiner rechten Hand”となっているし、penguin booksのThe New English Bibleでも，“(The Lord) is your defence at your right hand,”という具合に「右手」と訳されている。このような違いは単なる表現上の違い、翻訳の違いであって拘泥する必要はないと考える読者もいるかもしれない。日本語の場合、「右手」という言葉は「右側、右の方」という意味で使われることもあるからである。

しかしアウグスティヌスが読んでいたラテン語を見るとそのようには考えられないのである。アウグスティヌスの場合これはどうしても身体の一部としての「右手」という意味でないと理解できない。それは彼が読んだラテン語のテキストが今までにあげた翻訳とは異なっていて、そこに出てくる「右手」という言葉がそもそも何のことを言っているのかということアウグスティヌスは問題にしているからである。

II 『詩編』121, 5のラテン語について

アウグスティヌスが読んでいた聖書はイタラと呼ばれるラテン訳である。今日一般にラテン訳聖書といえば、アウグスティヌスの同時代人であったヒエロニムスの訳したヴルガータ訳を指すのだが、これはイタラのラテン訳とは異なるところがたくさんある。今問題にしている『詩編』121, 5について言えば、イタラでは“Dominus custodiet te. Dominus tegmentum tuum, super manum dexteræ tuæ”となっているがヴルガータでは“Dominus custodit te, Dominus protectio tua super manum dexteram tuam”となっている。細かいところの表現上の違いを除けば、両方とも大体同じことを言っている。しかしここで決定的に重要と思われる大きな違いはヴルガータでは *manum* と *dexteram* が対

格になっていて「あなたの右手という手の上に」と読めるのに対して、イタラでは *dexteræ tuæ* という属格になっていて、それが *manum* にかかって「あなたの右手の手の上に」としか訳せないからである。(*manus* は「手」、*dexteræ* は「右手」という意味)

アウグスティヌスは『詩編講解』の中でこの第121編についての講解し、この「あなたの右手の手の上に」という言葉を解釈している。(但し、この「第121編」というのもヴルガータの番号であって、そしてそれゆえに現行の聖書の番号でもあるのだが、アウグスティヌスの用いたイタラでは第120編となっている。イタラ訳の聖書は現在完全には復元されていないので手に入らない。混乱を避けるために便宜上現行の聖書の章節の番号に合わせた)アウグスティヌスはこの一見奇妙な「右手の手の上に」という表現に何か重大な隠された意味があると確信してそれを探求するのだが、その際有名な『マタイ』5, 39の言葉や他の「右手」、「左手」という表現が使われている箇所をも参照して、それらと整合するような解釈の道を探るのである。

念のために断っておかなければならないが、アウグスティヌスが聖書のさまざまなラテン語写本を持っていてどのラテン訳が良いのかを考えながら、詩編の説教や解釈を行っていたことは、彼が(おそらく「70人訳」と思われる)ギリシャ語の写本まで取り上げて、それについて或る人たちはこうラテン訳し、またある人は別な風にラテン訳し云々ということを行っている箇所が幾つかあることから明らかである。したがって「右手の手の上に」という奇妙な表現を見たとき、アウグスティヌスは他の写本も参照したはずである。それにもかかわらず、この箇所について他のラテン訳に何の言及も行っていないということは、彼が手にすることのできた写本がすべてこの *manum dexteræ tuæ* という表現になっていたことを示すと思われる。

アウグスティヌスがこの奇妙な表現をめぐる自ら提起し、自ら答えようとする問題は大きく分けて二つある。1 なぜ「神はあなたを守る」と端的に絶対的な言い方をしないで「あなたの右手の手の上の覆い」という言い方をしているのか。神が私たちの右手を守るとはどういうことなのか。神は私たちの左手は守っては下さらないのか。2 右手についてだけ言いたければ、なぜ「右手の覆い」と言わずに「右手の手の上の覆い」と冗語とも取れるような言い方をしているのか。

III 『箴言』3, 16, 「右手」と「左手」

これらの問題に対しては何よりも「右手」とは何か、「左手」とは何かという問いに答えることが先決

であろう。アウグスティヌスはその答えが明瞭に語られている箇所として『箴言』3, 16にある「右の手には長寿を、左の手には富と名誉を持っている」という言葉に注意を促す。長寿も富も名誉もみな望ましいものであって善きものであることは間違いがない。しかしなぜ、長寿は右手に、富と名誉は左の手にそれぞれ分けられているのであろうか。

アウグスティヌスはその理由を「右手」には天上の善きもの、「左手」には地上の善きものが割り当てられているからだという。しかしこの解釈に対しては長寿も地上的な善ではないかと反論されるかもしれない。これに対してアウグスティヌスはこの「長寿」とは永遠の命のことであって天上の霊的な善きものであるという解釈で答える。高齢であっても、そこに到達した時点で見れば、あるいはそれで終わるといふ地点から見れば短く見えるものである。どんなものでも終わりのあるものは短いのであって、聖書には永遠のものを指すとき「長い(longus)」という表現がよく使われているとアウグスティヌスは言う。その例として「日々の長さ(longitudine dierum)によって私は彼を満たす」『詩編』91, 16(但しアウグスティヌスのテキストでは90, 16)と『出エジプト記』20, 12「あなたの父母を敬え。そうすればあなたの神、主が与えられる土地に長く生きることができ」という箇所を指摘する。

これに対しては「主が与える土地」とはまさに地上の土地ではないかと反論されるかもしれない。これに対してさらにアウグスティヌスはこの「主が与える土地」とは地上のどこかの地域のことでないと言う。ここで言う土地とは「あなたは私の希望、生きているものたちの地における私の分」『詩編』112, 6(但しこの箇所は現行の聖書とはぜんぜん違っている。現行の聖書にはこのような表現はない)と言われているのと同じ永遠に生きている人がいる場所を指しているのであるとアウグスティヌスは言う。それだけではない。アウグスティヌスは現実に両親を敬っていても早死にするものは大勢いるし、両親を呪っていても長生きするものは大勢いるという事実を指摘する。だから『出エジプト記』のこの「長く生きる」とは「永遠に生きる」ことを指すと解釈すべきだと言う。

IV 『雅歌』2, 6, 『マタイ』6, 3, 『詩編』143, 8における「右手」と「左手」

アウグスティヌスは自分のこの解釈を『雅歌』2, 6にも適用する。「あの人が左の手を私の頭の下に伸べ、右の手で私を抱いてくださればよいのに」という言葉は花嫁が花婿について語っている言葉であり、それはつまり教会がキリストについて語ってい

る言葉ということにもなる。ここで体の各部の位置関係にアウグスティヌスは注意を促す。左手は頭の下に置かれている。右手は頭の上にあるかどうかは分からないが少なくとも左手よりは上にある。ではここでいう「頭」とは何か。それはキリストの住み給う所、すなわち信仰のことでありとアウグスティヌスは言う。左手は慰めとして頭の下にあり、右手は守り手として添えられている。右手も左手も神が与えるものであるが、時間的な善きものである左手は頭よりも大切にされてはならない。自分の右手(右側)に人間を召し給う神は左手(時間的な善、地上的な善)をどのように配剤すべきであるかを知っているのである。左手は左手らしく頭の下に置かねばならない。つまり「左手を頭の下に置く」とはこの世のすべての時間的な善よりも信仰のほうを大切にしろという意味だとアウグスティヌスは言う。

これと同じ解釈をアウグスティヌスは『マタイ』6, 3のイエスの言葉「右の手のすることを左の手に知らせるな」にも適用する。「左の手」とは人間が時間的な仕方ですべて所有するもの、「右の手」とは永遠にして不可変なものとして主がわたしたちに約束してくれるもののことである。そして神はこの世で生を送っている間の人間を慰めるものとして「左の手」である時間的な善を与えてくれる。「右の手のことを左の手に知らせるな」とは「何か善いことをするときには、永遠の命のために行え、地上の善のために行うな」という意味である。

そして「右の手のしていることを左の手に知らせている」人々の例としてアウグスティヌスは『詩編』143, 8の(現行の聖書では144, 8)「彼らの口は虚しいことを語り、彼らの右の手は不義の右手である」を挙げる。アウグスティヌスによれば、このような人たちはこそ本当の右の手を左の手と思い込み、本当は左の手であるものを右の手と勘違いしている人なのである。

これとは反対に「右の手」と「左の手」を正しく認識している人の例としてアウグスティヌスが挙げるのはヨブである。ヨブほど「左手」としてのこの世の幸福を持つものはいなかった。しかしヨブは「左手」を「左手」と正しく認識し、「右手」と混同することはなかった。悪魔の試みに遭って「左手」を失っても、内なる神の賜物を喜び、「主が与え、主が奪った。主の御心に適うことが起こった。主の御名が誉めたたえられるように。」(『ヨブ』1, 21)と言ったのである。

以上見てきた「左の手」についての解釈、及びヨブの例を見れば、先の問題「神は左の手は守ってくれないのか」に対するアウグスティヌスの答えは容

易に推察できるであろう。然り、神は「左の手」は守ってくれないのである。永遠の命を約束して下さる神は、信仰を持っているという理由によって、その人の病気や怪我を治してくれるわけではないし、病気にかからないように守ることも、怪我をしないように守ってくれることもないのである。ましてや富や名声、権力といっ「右手」と「左手」を混同するような人の目に「善きもの」と映るようなものについては論外である。

V 『マタイ』5, 39と『使徒行伝』22, 25

『マタイ』5, 39の「右の頬を打たれたら、左の頬をも差し出せ」というイエスの言葉についてこれ以上言うことはないようにも思われる。「誰かがあなたの信仰を奪おうとしたら、地上的な善を差し出して信仰を守れ」という意味だととりあえず解釈できる。しかし問題はこの「差し出す」ということの意味である。もちろんこれは「地上的な善を」犠牲にして「天上の善きもの」である信仰を守れということなのだが、この「犠牲にしても」という言い方は少し語弊があるので注意したい。「犠牲」というのは高価なものでなければ、少なくとも「失うのが惜しい」というものでなければ「犠牲」とは言わないように思われるからである。「地上の善」である「左手」はもともと永遠の命を与えて下さる神の約束に対する信仰を持つものにとっては「失っても惜しくない」ものなのであるから「犠牲」という日本語は適切ではないかもしれない。この「犠牲」は右の頬を打とうとする「信仰をもたないもの」にとってそう見えるだけでもいえる。信仰を持つものにとっては「左の頬は」は「いくら打たれても大して応えない」ものだと言える。もちろんこの世における慰めとなるものを失うという意味では失うことは望ましいことではないと言えるが。

そうだとすると「左の頬を差し出す」とは顔の向きを変えることによって「右の頬を打たれないようにする」という積極的に防御するという面が浮かび上がってくる。これは「相手のなすがままになっている」という無抵抗主義の考えとは異なるし、そもそも「左の頬を差し出す」という行為そのものが「信仰を」攻撃するものに対して「何もしない」わけでもなく、防御一辺倒でもなく、もっと他の何かを示しているのではないか。

アウグスティヌスは「右の頬を打たれたら、左の頬を差し出した」具体例としてパウロが「私はローマ市民である」(『使徒行伝』22, 25)と言った行為をあげる。(但しこの言葉 *Civis Romanus sum* はヴルガータには出ていない)。パウロの宣教の言葉を聞いて腹を立てた人々が騒いだので、取り調べる

ためにパウロを鞭打つことを千人隊長が百人隊長に命じた時、パウロは百人隊長に向かって「ローマ市民権を持つものを裁判にかけずに鞭打つことが許されるのか」と言い返した。人々はすぐに手を引き、千人隊長もパウロを縛ってしまったことを知って恐ろしくなった。アウグスティヌスはこれを解釈して「彼らはパウロの右手を軽蔑したのに対して、パウロは左手を使って彼らを脅した」(*Dexteram contemnebant illi, et de sinistra terrebat ille*)。なぜパウロはそのようなことをしたのか。それは「キリストを信じていなかった彼らがパウロの右手を恐れることがありえなかったから」(*quia illi dexteram eius timere non poterant; nondum enim Christo crediderant*)である。神を信じないものは神を恐れることもない。そういう相手に「神の天罰が下る」などと言っても無益である。彼らが恐れるのは世俗の力であり、この世の権力なのである。

このパウロの例を見ると「左の頬を差し出す」ことは必ずしも「打たれるため」に差し出すわけではないことが分かる。時間的な地上の善を差し出すことによって霊的な天上の善を守るということは必ずしも前者を後者のために「犠牲にする」ことだけではなくて、(もちろんそういう場合も多いのだが)相手によって相応しい手段をとることを意味するとアウグスティヌスは考えていたように思われる。

VI 'manus'の意味について

最後にII章の末尾で触れた「右手の手の上の覆い」という表現について、このような冗語とも思えるような表現になっているのには、どのような意味が隠されているとアウグスティヌスは解釈しているかについて簡単に述べたい。

この「手」(*manus*)というのは「力、権能」を表わしているとアウグスティヌスは言う。したがって、例えば「神の手」(*manus Dei*)と言えば、これは神の力のことである。そのことを示す用例としてアウグスティヌスは『ヨブ記』1, 11で悪魔が言った「あなたの手を伸ばしなさい、そして彼の持っているものすべてに触れてみなさい」(*Mitte manum tuam, et tange omnia quae habet*)を挙げる。この「あなたの手を伸ばしなさい」とは「権能を与えてください」(*da potestatem*)の意味である。これでもまだ納得せずに神が人間やほかの動物と同じように「手」を持っていると思ひ込む人に対して『箴言』18, 21の「生も死も舌の手にある」(*Mors et vita in manibus linguae*)を挙げる。(ただしヴルガータでは *in manu linguae* と単数形になっている。)舌は身体の器官の一つであるが、それに「手」があるはずはない。これは「舌には人を活かしたり、死に

至らしめたりする「力」(potestas)がある」ということだとアウグスティヌスは解釈する。それはつまりイエスの「あなたは自分の口によって義とされ、あなたの口によって罪あるものとされるであろう」(『マタイ』12, 37)と同じことを言っているのだとアウグスティヌスは言う。

そうすると「右手の手」とは「神の右側に座る権

能」のこと、すなわち「天地創造の時から、お前たちのために用意されている国を受け取る(『マタイ』25, 34)権能」のことであり、「神の子となる権能(potestas filios Dei fieri)」(『ヨハネ』1, 12)のことである。したがって「右手の手の上の覆い」とは「神の子となる権能を守ってくれるもの」という意味なのである。

(平成14年10月31日受理)

Augustine on the Passage in Matthew 5,39, “if Someone Slaps You on the Right Cheek”

Akihiro HAYASHI

(Accepted Oct. 31, 2002)

Key words : RIGHT, LEFT, HAND, BIBLE

Abstract

Many modern people think, probably influenced by Tolstoy and Gandhi, Jesus' words, “if someone slaps you on the right cheek,” mean passive resistance or non-violence. But Augustine interprets this passage much differently. According to Augustine, “the right cheek” means “spiritual or celestial good things”. “The left cheek” means “material or terrestrial ones.” The words “turn and offer your left” mean “defend your spiritual goods (especially your faith) at the sacrifice of your material goods.”

Correspondence to : Akihiro HAYASHI

Department of Clinical Psychology, Faculty of Medical Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare

Kurashiki, 701-0193, Japan

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.12, No.2, 2002 241-245)